

コメント 近代東アジアの「扶鸞」運動

—— 中国・ヴェトナムの事例から ——

武 内 房 司*

ヴェトナムを含む近代の東アジアにおいては直接の神の声をうかがい、それを記録し、刊行することで宗教感情を共有しあう文化が各地で誕生しました。中国・台湾・香港・ヴェトナムで盛んに行われ、今日も実践されている“扶鸞”ないし“扶乩”と呼ばれる儀礼がそれです。扶鸞はもともと、紫姑神という江南の地域神を降臨させ作物の豊凶をうらなう儀礼に過ぎませんでしたが、宋代以降、文人士大夫層に積極的に取り入れられていきました。科挙の試験問題を神のお告げによって知りたいという現実的な期待もあったといわれていますが、ともあれ、こうした文人たちが担い手となり、また“乩”という神を降臨させる木製の棒を道具として駆使することで、季節にかかわらず、いつでも神を降臨させることができるようになったといわれます。

12世紀以降、士大夫のなかには自ら信奉する道教の終末論的メッセージをこの扶鸞をつうじて獲得し、それを書物にまとめる者も現れます。いわゆる“鸞書”と呼ばれる神の啓示集が作成されていくようになります。しかし、大きな画期となったのは、1840年、四川重慶府定遠県龍女寺で起こった扶鸞運動でした。そこでは、神の啓示がより救済宗教的色彩を帯び、士大夫エリートの枠を越えて大衆化していく道が開かれていきます。この扶鸞運動で作成された鸞書に『指路宝筏』という経巻がありますが、そこでは無極天尊という至高神が登場します。これは無生老母という16世紀以降しだいに中国の民衆の間に広まる女性神の変名です。無生老母信仰は明瞭な人類救済神話を持つことで知られますが、救済型宗教運動の新たな宣伝形式として扶鸞が活用されていくこととなります。早くも1843年には先天道派がこの扶鸞によって無生老母の啓示を引き出しその教えを核として教団を結成するに至りますが、同様に同善社や一貫道など今日に連なる救世団体型宗教の多くに受け継がれていきます。

注目されるのは、こうした扶鸞運動が民衆運動に少なからぬ影響を与えた点です。四川で扶鸞運動が起こって約10年余のことですが、四川に隣接する貴州省銅仁府というところで大規

* たけうち ふさじ 学習院大学文学部

模な税金不払い（抗糧）闘争が起こります。当初、挙人という科挙の受験資格を持つ地域のエリートの主導のもとに穏やかな形で進められていた運動が、扶鸞による神の啓示を受けたと称するグループの登場とともに運動のヘゲモニーは完全に逆転し、一挙に過激化していくことになりました。つまり、扶鸞は民衆の宗教感情を解放することで、既存の序列や秩序を越えた社会運動の展開を可能にさせていったのです。じっさい、この銅仁府の抗糧暴動に限らず、近代中国で起こった様々な民衆運動にはしばしばこの扶鸞が結びついていました。

興味深いのは、扶鸞は中国社会を越えて東南アジア、とくにヴェトナムにも広がりを見せた点です。今回のワークショップで、高津茂先生がカオダイ教の降神術について詳細に報告してくださいましたが、カオダイ教の降神術の流れは確かに少し複雑です。サイバンと呼ばれるフランス流心靈術の影響もあるのですが、近年、初期カオダイ教の運動の底流に、中国華南で勃興した先天道の流れを汲む明師道とよばれる宗教運動の影響が少なからず見られることが明らかになってきています。この明師道もまた、扶鸞を日常的に実践し、啓示を鸞書にまとめる伝統を持っていました。つまり、カオダイ教はフランス流心靈術と中国の扶鸞運動が合体するかたちで成立した新宗教でもあったわけです。

さきほど、扶鸞が導入されることで人々の宗教感情を高揚させ、民衆運動に結びついていった中国の事例を紹介しましたが、カオダイ教が成立してまもない時期に、同じくヴェトナム南部のメコンデルタ地帯においても、扶鸞と結びついた農民蜂起が起こりました。1927年5月、バクリュウ省ニン・タイン・ロイ村で起こったこの農民蜂起は、フランス植民地当局が、フランス人地主に有利なかたちで土地が払い下げられたことに対する社会的プロテスト運動であったのですが、運動の指導者は、「神霊と直接連絡をとりあう新しい信仰の儀礼」を実践していたといいます。フランス植民地当局がつかんだ情報によると、この信仰は、カオダイ教のメッカであるタイニンに巡礼した村人によって村に持ち込まれたものであるということです。この「新しい信仰の儀礼」が「扶鸞」を指しているのはほぼ間違いないでしょう。

扶鸞による神の啓示は最終的に鸞書にまとめ上げられますが、中国・台湾・香港・ヴェトナムなど空間的にも広がりを見せるなかで、しだいに地域色ゆたかな鸞書を生み出していきます。とりわけヴェトナムにおいてはクオック・ゲー（現代ヴェトナム語）によるテキストが登場することで、民衆の宗教生活がいきいきと記録されるようになります。今回は扶鸞が社会運動と結びついた事例をご紹介しましたが、今後、これらのテキストを系統的に収集し、民衆の宗教感情を丹念に読み解いていく作業が必要になってくるように思います。

参考文献

- 武内房司 「清末四川の宗教運動：扶鸞・宣講型宗教結社の誕生」『学習院大学文学部研究年報』37号，1990年
- 可兒弘明 『民衆道教の周辺』風響社，2004年，特に第1部第1章「扶鸞雜記」
- チャン・ホン・リエン（高谷浩子・武内房司訳）「仏領期ベトナム南部バクリユウ省ニンタインロイ村における農民闘争と宗教」武内房司編『越境する近代東アジアの民衆宗教：中国・台湾・香港・ベトナムそして日本』明石書店，2011年
- ゴースール，ヴァンサン（梅川純代訳）「近代道教の終末論：明清期における扶鸞と士大夫層における終末論の勃興」（武内房司編『戦争・災害と近代東アジアの民衆宗教』有志舎，2014年）
- 武内房司 「先天道からカオダイ教へ：ベトナムに根づく中国近代の民衆宗教」（武内房司編『戦争・災害と近代東アジアの民衆宗教』有志舎，2014年）